

国・行政のあり方に関する懇談会 メンバーからのメッセージ（牛窪 恵）



マーケティングライター。世代・トレンド評論家。(有)インフィニティ代表取締役。財務省財政制度等審議会専門委員ほか。
1968年東京生まれ。日大芸術学部 映画学科(脚本)卒業後、大手出版社に入社。5年間の編集及びPR担当の経験を経て、フリーライターとして独立。2001年4月、企業との新商品・サービス開発などを目的にマーケティングをおこなうインフィニティを設立。
現在、日本経済新聞、朝日新聞、『AERA』ほかに連載、定期寄稿中。
著書から派生した「おひとりさま(マーケット)」(05年)、「草食系(男子)」(09年)は、新語・流行語大賞に最終ノミネート。全国での講演活動やテレビ、ラジオのコメンテーターとしても活動中である。

■ 日々、皆さまの「ナマの声」を聞くながで

こんにちは。マーケティングライターで、マーケティング会社・インフィニティの代表、牛窪恵です。私自身は、一般には「おひとりさまマーケット」「草食系男子」、あるいは「年の差婚」といった言葉を世に広めた人物として認知されているかと思いますが、私が経営する会社では、スタッフたちが日々、消費者、一般的の男女の方々に山ほどのインタビューを繰り返し、その中から生まれたキーワードを、本や記事(さらには、企業の新商品やサービス)にしています。
つまり、一般の方々のナマの声を広く聞く、数多く聞くというのが、私の会社の強みです。

そういう中で今回、内閣官房の懇談会のメンバーに選ばれたときに(他にも行政関係の委員を多々させていただいていますが)、正直言って、「今回の懇談会で私がどういうことでお役に立てるのか」と、とても不安でした。



でも、懇談会に出席するうち、じつは私の得意分野、例えば「世代論」……
バブル期に青春時代を過ごした方、
不況期に過ごした方、あるいはずっと右肩下がりの時代しか知らない方々、
そういういろいろな世代の方々の生き方や価値観と、今回の内閣官房の「国・行政に関する懇談会」のテーマがリンクするのではないか？

……具体的には、(今回、かなり幅広いテーマでしたが)高齢化社会の問題や、IT化、若者の起業、教育、地元コミュニティの作り方など、社会のあらゆる問題を、じつは自分の得意領域である「世代論」にも引き寄せて考えられるのでは？……と気づきました。

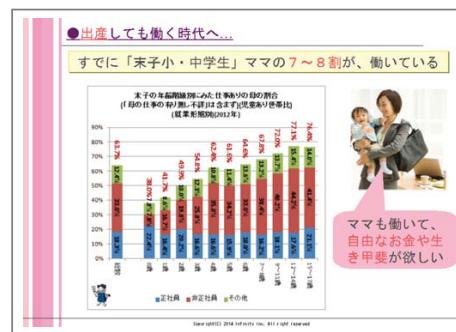
■ おひとりさま社会で、血縁から「地縁」「知縁」の時代へ



さらに、例え「おひとりさま」について。

これは皆さまご存知のとおり、現40代半ばの女性からは、女性の社会進出が進んだり、男性も(バブル崩壊後の)不況でなかなか結婚に踏み切れなくなり、昨今シングルの男女が飛躍的に増えているといった問題があります。

ただ、これと並行して、若者の間では別の問題が発生している。



例えば、雇用格差の問題や、若い世代ほど、結婚・出産しても働き続ける「共働き」の女性が増えているといった傾向です。

これらは、私たちがこれまで研究してきたテーマ。

これに引き寄せて、たとえば今後さらに「おひとりさま」が増えたり、共働き家庭が増えると、社会(含:国と行政)はどう変わっていくかなければならぬのかと、まず(懇談会の)初期の段階で考えてみました。

例えば、これまでの日本を支えていた「血縁(チエン)」の文化が、独身者や共働きが増えることで、少しづつ成り立たなくなっていく。
ならば同じチエンでも、今後は「知縁(知人や学びの縁)」や「地縁(土地や地元の縁)」の時代に変わっていくべきでは？といったキーワードが浮かびます。

するとここから派生して、「地縁」の先には、「地域コミュニティ」があり、そこから、友だち近居や防災マップ、ボランティア……



など、今回の懇談会でも議論されたテーマがつながってくる。私たちが得意とする「おひとりさま」が老後、地域と協調してどう過ごすか、といった問題も浮かんできます。

また、「知縁」から派生する、「バーチャルゆるつながり」。

血だけではなく、バーチャルの「知」における「ゆるつながり」が大事だよということになると、例えば、じゃあSNSをどうするか、マイナンバーをどうするか、国として監視社会とセキュリティをどう考えるべきなのか……など、これも懇談会のテーマにつながってくる。「学び人脈」の先の、若者起業やダイバーシティ、農業イノベーションなどについても同様です。

あるいはシニアの問題も、「知縁」や「地縁」に関わってくる。

私は「WinWinシニア」を、一つのキーワードに据えました。すなわち彼らの老後を、国が支えて差し上げるとか、国からなにかをお払いとする、という一方的な目線だけではなく、まだまだ若く元気で働き続けたい、60歳を過ぎて起業したい、または「自立型」の高齢者向けシェアハウスに住みたい、といった方々と、お互い WinWin の関係が築けないか、もっとシニア同士の、あるいはシニアと社会の「相互扶助」も念頭に置くべきでは、といった目線です。

■ なにごとも「自分ごと」として捉えられる！

こうして見えてくると、じつは今回の懇談会のあらゆるテーマが、私たちの得意分野からの派生事項として考えられることが分かってきました。

そう、なにごとも「自分ごと」として捉える大きさを、今回痛感したのです。

ただ、やり残したことも2つあります。

1つは今回、中央（都心の中央官庁）を場として物事を考えてきたので、地方の声を拾いきれない、ということです。

もちろん、海外や地方の声を拾っていらっしゃる様々な有識者の方のご意見も伺いましたが、やはり私自身、全国各地で直接いろんな方々の声を聞く、というのが仕事であり、使命でもあ

ります。今後はもう少し全国の皆さん（インターネット越しにでも）深くやりとりをして、どういう政策が必要なのか、いまの国や行政にはどんなところが足りていないのか、というお悩み、ナマの声を聞きたい、と強く感じました。

そして、もう1つ。

今回の懇談会では、これから実行段階でたぶん一番のテーマになる、「どこまでを国や行政が担当するのか」「民間やNPOと協業するのか」、あるいは「何を、いつまでにどう実行するのか」という、仕分けやプライオリティ（優先順位）を、まだ話し合っていないんですね。

「こういう方向性が良いのでは？」といったアイディアは、本当にいろいろと出てきたんですが、そのうちどこまでを、いつ誰がやるのか、そこがまだない。

つまり、「引越し」に例えると、「あの建物がいいかもしれない」「この沿線がいいんじゃないかな」というプランは、すでに多くあるのですが、「でも予算がこれしかないから、駅からもうちょっと遠くないとダメですね」とか、「〇月×日に引っ越しですから、いつまでに、誰に何をお願いしないとダメだよね」という、現実に即したところまでは、まだたどり着けていない。

そのあたりの、現実的で地に足が着いた議論が、今後確実に必要になってくるでしょう。

■ 今後は、地方や一般の方々との対話を通じて……

ただそのうえでも、やっぱり私たちメンバーだけの「知」では弱い。

今後は、一般の方々ともっともっとやり取りして、現実に即したプランを作り上げて行きたい、というのが個人的な希望です。そこが今回、やり残した部分もあります。

とくに、これから日本を考える上で、地方の問題は深刻です。

先日も報道されたとおり、2040年には約半数の自治体で、20代、30代の若い女性の人口が、いまの半数にまで減ってしまう。そのあたりの問題をどう捉えていくか。地方の雇用創出や改善、あるいは地元に居続けたいのに出なければならない人たちの人口流出、こういう人たちをどうやって地元に戻していくか、本当の「幸せの道」というものをプレゼントしていくか。それが、これから私たちの大きな使命であり、今後ぜひ重点的に話し合ってみたいと思ったテーマです。

……以上、どうもありがとうございました。

◆今後の日本◆ アイドルグループのように、一人ひとりが個として「ソロ活動」をするときもあれば、知縁や地縁で「ユニット」を組むこともある =「コラボ型共創社会」へ……？
～アイドルや選手本人はもちろん、ファンやサポーター全員が担い手！～